

日本家庭科教育学会 2023（令和5）年度例会 プログラム

2023年12月3日（日）

13：30～16：00

オンライン開催

【日 程】

開会

13：30 開会の辞

趣旨説明

シンポジウム

13：40 シンポジスト紹介

（コーディネーター 貴志 倫子 氏）

13：45 後藤 忍氏

14：05 石橋 一昂氏

14：25 土屋 善和氏

（休憩 14：45～15：00）

15：00～16：00 ディスカッション・質疑応答

閉会

16：00 閉会の辞

【シンポジウム】

2023年12月3日（日）13:30～16:00 オンライン

テーマ：家庭科における主要概念の検討

—他教科等の「探究・批判」のとらえから見えてくる家庭科の独自性—

趣旨

急速に、大胆に変化する社会を生きる子どもたちに、そこを生き抜く資質・能力を育てる教育の試みが続けられている。家庭科の専門に身を置く私たちは、他教科等と連携しながら家庭科は何をどのように子どもたちに届けていけるか、各教科の専門性の中で家庭科でなければできないことは何かを問いながら、ここまで家庭科教育の研究と実践を蓄積してきた。

2022年8月以降、本学会として家庭科理論研究に取り組み、これまでの成果を書籍としてまとめ2023年度中に出版する予定である。今期も引き続き、家庭科における主要概念の検討を通して教科の独自性についての議論を更に深めていく。

今回の例会では、今日の教育を特徴づける「探究」と「批判」を取り上げ、その理論的背景、他教科でのとらえ方、実践について検討することを通して、家庭科ならではの「探究」及び「批判」の意味と教育的実践について明らかにする。

シンポジスト

「教育における「探究（探求）」と「批判（批評）」の概念」

後藤 忍氏（福島大学教授）

「主に数学教育研究から見た探究と批判」

石橋 一昂氏（岡山大学講師）

「家庭科における「探究」と「批判」—批判的思考からのアプローチ」

土屋 善和氏（琉球大学准教授）

コーディネーター

貴志 倫子氏（福岡教育大学教授）

シンポジストのプロフィールと報告内容

後藤 忍氏（福島大学教授）

福島大学教授。1972年大分県生まれ。大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻修了。博士（工学）。専門は環境計画、環境システム工学、環境教育。2022年度に日本環境教育学会の研究委員長として教科教育学コンソーシアムの研究推進委員会に参加し、シンポジウム「教科教育学に共通言語はあるか」で中間報告を行った。

報告「教育における「探究（探求）」と「批判（批評）」の概念」

筆者は、科研費（22H01012）「教科教育学のターミノロジーとメソドロロジーの体系化研究—学術共同体の構築のために」（代表：草原 和博 広島大学教授）の研究協力者として、各教科・各学協会では使われている用語・概念のうち、「探究（探求）」と「批判（批評）」に着目して意味比較を行った。

「探究」は、学習指導要領では、学問研究的傾向が強い科学教育的な探究と、問題解決的傾向が強い社会科教育的な探究が同居していることが指摘されており、加盟学協会の用語集等では両者の違いが反映された説明が見られるものがあつた。「探求」は、自己の在り方生き方を模索する文脈で使われていたが、使い分けは必ずしも厳密ではなかつた。

「批判」は、学習指導要領では、家庭科を含む多くの科目で出現しないなど、位置づけが十分ではなかつた。一方、加盟学協会の用語集等では家庭科や環境教育など多く出現し、重要性がうかがわれた。「批評」は、国語科や美術科などで出現し、人によって異なる価値観を前提にしたうえで、根拠をもって作品や授業を評価する文脈で使われていた。

加盟学協会の用語集等において「探究（探求）」と「批判（批評）」を含む見出し語の双方が出現した科目は、社会科、音楽科、家庭科、環境教育であり、特に問題解決型学習や持続可能性教育の文脈で密接に関連するものとして扱われ、欧米的な見解との共通点が見られた。

これらの内容に加えて、筆者の専門領域である環境教育における「探究」や「批判」に関する実践例も紹介したい。

石橋 一 昂氏（岡山大学講師）

1992年11月30日広島県生まれ。岡山大学講師。専門は算数・数学教育学。2020年3月広島大学大学院教育学研究科博士課程後期修了。博士（教育学）。広島大学附属福山中・高等学校教諭、日本学術振興会特別研究員（DC2）、岡山大学助教を経て現職。国立教育政策研究所プロジェクト研究「新たな学びの実現に向けた教育課程の在り方に関する研究」探究班委員などを兼任。

報告「主に数学教育研究から見た探究と批判」

まずは数学教育研究から探究を見る。日本の学校教育では、「習得・活用・探究」という考えが示され、教科の知識・技能を習得しある程度活用できるようになってから、探究で横断的・総合的な学習をすることになっている。一方で、近年の数学教育研究では、研究者の探究をモデルとした学習活動が提案されており、前述の順序とは逆で、探究の中で必要に応じて必要な知識・技能を習得することが想定されている。次に数学教育研究から批判（的思考）を見る。数学教育において批判（的思考）に課せられた役割には、数学学習の副産物としての批判的思考、数学教育の明確な目標としての批判的思考、数学的問題解決の条件としての批判的思考、数学的モデリングや統計学によって社会的、政治的、環境的な問題に批判的に関与することが含まれる。このような関与には、これらの文脈で数学が果たしている役割そのものに対する批判も含まれる。最後に本報告では、教科等横断的な探究と批判も見る。探究と批判は、特定の教科・特定の単位だけで行われるものでもない。例えば問いを工夫することで、教科等横断的な探究と批判を展開することができる。

土屋 善和氏（琉球大学准教授）

東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科学校教育学専攻博士課程を修了。修士・博士課程在学時には中高家庭科の非常勤講師も勤める。現在は、琉球大学教育学部生活科学教育専修の准教授（教科教育専門）。家庭科における学力を主な研究テーマとし、近年は特に家庭科の学力として批判的思考に着目した授業研究を進めている。

報告「家庭科における「探究」と「批判」—批判的思考からのアプローチ」

批判的思考は、懐疑的・反省的・合理的であり、さらに問題解決や意思決定の際に働く創造的かつ実践的な思考とされている。「批判」とは、対象をよりよいものに創り上げていくための行為なのである。また「探究」とは、物事の在り方や本質を深く考えながら探っていくこととされている。そして物事の本質を見抜くためには懐疑的・多面的な視点が欠かせない。つまり、「探究」のためには、「批判」が必要なのである。

家庭科では、生活の問い直しや生活課題の解決が重要視されている。それらには懐疑的かつ省察的な批判的思考を働かせることが不可欠である。さらに家庭科は、よりよい生活を創造できる生活者の育成を目指している。しかし、個々人によってよりよい生活の在り方は異なる。つまり、よりよい生活を創造するためには、自分にとってのよりよさを「探究」することも必要であるだろう。このように、家庭科における「探究」と「批判」とは、よりよい生活を創造するための重要な行為であるといえる。